

中山遺跡

(第2次)

～緊急発掘調査報告書～

1986

箕輪町教育委員会

中山遺跡

(第2次)

1986

箕輪町教育委員会

序

箕輪町教育委員会

教育長 樋口彦雄

昭和57年より箕輪中学校の新築に着手した。この全面改築は旧グラウンドに校舎を建て、旧校舎跡地を新グラウンドにするものであった。この新グラウンドは全面覆土とする計画のため、主として遺跡保存を主目的とする緊急発掘調査を、昭和60年に実施した。

今回は新グラウンドの南端に50mプールを新設するための、緊急発掘調査である。遺構に影響がないように、プール本体を埋設方法によらず、地上に設置する方法によった。しかし地形、設計の関係上、一部循環装置をおく場所が地中となるため、其の部分に限り、緊急発掘調査をしたものである。

細部については章を追って明らかにするが、縄文時代中期初頭という時期の遺構、遺物が、発見できたことは、町内ではこの時期のものが少ない為、特に有意義であった。発掘作業中、学校近くであった為、児童、生徒の教師引率の見学も多く、現地での教育に役立たせることができた。

例 言

1. 本書は長野県上伊那郡箕輪町大字中箕輪 10230番地に所在する遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は昭和61年4月9日～4月24日まで実施し、引き続き整理作業及び報告書の作成作業を行った。
作業の分担は次の通りである。
土器の復元、 樺沢幸一、
遺構実測図の整理・トレース、 竹入洋子
土器実測・トレース、 竹入洋子
土器拓影・断面実測・トレース、 山内志賀子
石器実測・トレース、 竹入洋子
拓影・図版作製、 山内志賀子、柴登巳夫
写真図版作製、 山内志賀子、柴登巳夫
3. 本書に掲載した遺構・遺物の写真は柴登巳夫・石川寛が撮影したものを使用した。
4. 本書の執筆は主として柴登巳夫が行った。
5. 本書の編集は発掘調査事務局が行った。
6. 本書の資料は、箕輪町郷土博物館に保管されている。

本文目次

題 字	教育長	樋口彦雄
序	教育長	樋口彦雄
例 言		
本文目次		
挿図目次		
図版目次		
第 I 章	遺跡の立地	1
第 1 節	位 置	1
第 2 節	自然環境	2
第 3 節	歴史的環境	3
第 II 章	調査の経過	5
第 1 節	発掘調査に至るまで	5
第 2 節	調査の概要 (調査日誌)	6
第 III 章	遺構と遺物	9
第 1 節	遺 構	9
1.	J-1 号住居址	10
2.	土 拵	11
イ)	D-1, D-4, D-5 号土拵	11
ロ)	D-7 号土拵	12
ハ)	D-2, D-6, D-8 号土拵	13
ニ)	D-9 号土拵	13
第 2 節	遺 物	14
1.	土 器	14
2.	土 製 品	15
3.	石 器	21
第 IV 章	ま と め	25

挿 図 目 次

第1図	位置図	1
第2図	遺跡周辺の地形	2
第3図	周辺遺跡分布図	3
第4図	遺構全測図	9
第5図	J-1号住居址実測図	10
第6図	D-1, D-4, D-5号土坑実測図	11
第7図	D-7号土坑実測図	12
第8図	D-2, D-6, D-8号土坑実測図	12
第9図	D-9号土坑実測図	13
第10図	出土土器実測図	14
第11図	土製品及び土器実測図	15
第12図	土器拓影	16
第13図	グリッド出土土器拓影	17
第14図	既出土器拓影	18
第15図	既出土器実測図	20
第16図	出土石器実測図(1)	21
第17図	出土石器実測図(2)	22
第18図	出土石器実測図(3)	23
第19図	出土石器実測図(4)	24

図 版 目 次

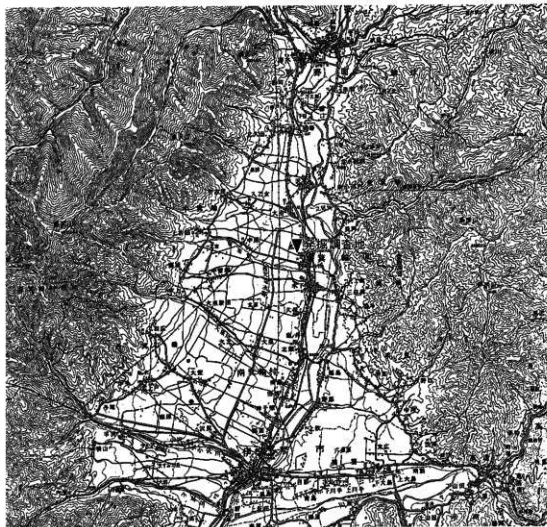
図 版 I	調査地近影・遺構全景
図 版 II	住居址・土坑 (1)
図 版 III	住居址・土坑 (2)
図 版 IV	土坑 (1)
図 版 V	土坑 (2)
図 版 VI	調査状況 (1)
図 版 VII	# (2)
図 版 VIII	視察・見学状況
図 版 IX	遺物出土状況
図 版 X	出土遺物 (1)
図 版 XI	# (2)
図 版 XII	# (3)
図 版 XIII	調査参加者

第I章 遺跡の立地

第1節 位置 (第1図)

中山遺跡は、長野県上伊那郡箕輪町大字中箕輪 10230番地に所在する。箕輪町のほぼ中央に位置し、箕輪中学校旧校舎敷地が遺跡の中心である。天竜川西岸段丘上突端に列状に並ぶ遺跡の一つであり、北隣には、町商工会館、博物館、消防署、町役場庁舎と続いている。

国鉄飯田線伊那松島駅からほぼ西に約 500mの河岸丘上突端にある。標高はおよそ 700mで眼下を流れる天竜川との比高は約30mを計る。



第1図 位置図

第2節 自然環境

諏訪湖を源とする天竜川は、伊那の平を形成し、箕輪町を東西に二分するように南流している。遺跡周辺を特色づける地形は、扇状地と河岸段丘である。

天竜川西岸に発達した雄大な扇状地は、天竜川に流れこむ中小河川によって形成されたものであるが、なかでも最も流路の長い大泉川と黒沢山を源として流れる帯無川によって形成された扇状地上の段丘突端に中山遺跡は位置している。この複合扇状地は礫・砂・粘土・ローム（火山灰）等が相重なって堆積したもので、東方に向かって緩やかな傾斜をしている。

遺跡の立地する段丘上より東方に目を転ずれば、眼下には天竜川とその氾濫源が広がり、天竜川左岸（竜東）へと続いている。竜東の扇状地及び段丘等はこの地域においては小規模である。その背後には赤石の山脈を経て、はるかにそびえる雄大な南アルプスの麗峰を見渡すことができる。竜西の複合扇状地の扇頂部・扇央部より地下に浸透した地下水は、伏流水となって洪積台地の下をくぐって段丘崖下に清水となって湧き出している。この段丘下の湧水群は今日でも水道水として重要な資源であり、年間の水温もほぼ一定の15℃前後の測定値が得られている。この豊富でしかも清澄な湧水が段丘上に居住した古代人の飲料水であり、農業用水でもあったのである。このように地理的自然条件に恵まれた一帯は古代人にとって絶好の居住地であったにちがいない。



第2図 遺跡周辺の地形

第3節 歴史的環境

中山遺跡を囲む歴史的環境は実に豊富なものがある。箕輪町は河岸段丘と数多い扇状地によって形成された地形は古代人にとって好的な居住地であったにちがいない。そのため町内には先史より近世に至る歴史上の遺跡に富み、その総数は200ヶ所ほどに及び、上伊那郡内における屈指の遺跡地帯といわれている。

その中においても天竜川西側の段丘突端部に切れ目なく並ぶ遺跡群がある。中山遺跡はこの中の一つである。遺跡の南側には藤山遺跡があり、帯無川を過ぎると県立箕輪工業高等学校のある上の林遺跡に至る。本遺跡は校舎の全面改築に伴い、昭和55年から57年にかけて、3次の発掘調査を実施した。縄文時代早期末から中世に至る多数の遺構・遺物が出土し、その内容がかなり解明されている。続いて南側には北城遺跡が位置している。この遺跡は昭和47年に調査が実施され弥生時代後期から平安時代にかけての大集落が検出されている。段丘上に並ぶ遺跡群の中でも最大級のもので推定される。町境から南箕輪村に入っても同様に遺跡が続いている。北側に目を転ずれば、町役場の位置に松島氏の城跡へと続いている。中世末に武田軍を相手に勇名を鳴り響かせた藤沢氏の支城と伝えられる。現在はこの地内に城主の墓地といわれる場所があり、町指定史跡となっている。

深沢川が天竜川と合流する段丘に、全長60m、前方部の巾45mという壮大な規模を有する松島王墓古墳がある。6世紀後半の築造と推測されるこの大古墳を見る時、これを造ることが可能な絶大な権力と、その経済力は何であったのであろうかと考えさせられる。周辺の地形を見てまず目に入るのが段丘下の氾濫原である。ここは箕輪遺跡と呼ばれる遺跡地帯であり、その規模は100ヘクタール余といわれている。古代水田址を含む遺跡であり、当時から米生産の一大中心地であったと考える。これは古墳出現の大きな要因であり、以後においても、ここ一帯から生産される米は、時代の権力者の目をつける所となっている。その一つとして、藤沢頼親が建武年間に箕輪を領して赴任に際し、福与城を選んだのは、その天険もさることながら、眼下に見る穀倉地帯を戦力資源とするという目算理由があったと思われる。田中城を水田地帯の真中に築いたのも同様な考えがそこにあったものと推測される。

一帯の歴史的環境はどの時代を見ても、段丘上と天竜川面とが、必ず何らかの関係を有して来ている。これは竜東においてもほぼ同様なことがいえる。

中山地籍は現在箕輪中学校の敷地が大部分を占めている。遺跡の中心はグラウンドの下になっているが、大切な遺跡の一つである。



- ①中山 ②北城 ③南城 ④猿楽 ⑤藤山 ⑥箕輪 ⑦王墓古墳
 ⑧中道 ⑨五輪 ⑩並木下 ⑪一の宮 ⑫中曾根北 ⑬向垣外 ⑭山の神
 ⑮天伯 ⑯上人塚 ⑰垣外 ⑱内城 ⑲大泉 ⑳宮の上 ㉑上ノ林
 ㉒北垣外 ㉓黒津原 ㉔矢田 ㉕上金 ㉖大原 ㉗澄心寺 ㉘御射山

第3図 周辺遺跡分布図

第Ⅱ章 調査の経過

第1節 発掘調査に至るまで

昭和57年度より開始された校舎全面改築に伴い、旧校舎跡地をグランドにするため、遺跡の保存状況を主目的とした、緊急発掘調査を実施した。この調査により旧校舎跡地の遺跡状況をほぼ推測することができた。昭和61年度に入り、生徒が使用するプール建設が計画実施される運びとなった。これは今迄のプールの老旧化と、道路計画によるものである。プール新設に伴い、発掘調査について県教育委員会文化課と現地において協議を重ねた。この結果、地下遺構に影響を及ぼす範囲をなるべく少なくするため、プール本体を地上式にし、グランド面に乗せるような設計をした。そして、機械室等、プール西側の部分は深く掘下げる設計のため、その部分を調査するという結果となった。

今年の夏には新しいプールを使用したいという計画があるため、発掘調査は4月から実施する運びとなった。

イ) 調査の概要

- 遺跡名 中山遺跡
- 所在地 長野県上伊那郡箕輪町大字中箕輪 10230番地
- 発掘期間 昭和61年4月9日～4月24日

ロ) 調査団

- 調査団長 樋口 彦雄 (教育長)
- 調査担当者 柴 登巳夫 箕輪町郷土博物館学芸員
- 調査員 石川 寛 "
- " 竹入 洋子

ハ) 事務局

- 樋口 彦雄 箕輪町教育委員会教育長
- 北川 文雄 " 社会教育課長
- 太田 文陳 " 社会教育係長
- 柴 登巳夫 箕輪町郷土博物館学芸員
- 石川 寛 " "

二) 調査協力者

- 山内志賀子 唐沢 清人 山岸 工 井上 武雄 松田 幸雄
- 小林 信義 小松啓一郎 清水 節治 野沢 徳章 野沢 良久
- 藤森 秀男 柴 佐一郎 飯塚真佐志 赤沼 悦子

第2節 調査の概要

イ) 調査日誌

4月9日 (水)

本日より遺跡発掘を開始する。町理事者、教育委員会、箕輪中学校そして調査団共同の結団式及び神事を実施した。箕輪中学校のプール建設に伴う調査であり、プール開きの日程に間に合うためには調査の日程も忙しい内容である。

直接調査に関係しない工事は、すでに手が付けられている。結団式後、直ちに調査範囲の設定と、グリッドの位置が決められた。表土はグラウンドであり、前回の確認調査で遺物包含層が調査されていたため、約40～50cmをブルドーザーで排土しその後は手掘りを進める。本日のところでは32グリッドを設定した。

4月12日 (土)

グリッドごとの調査開始。J～M列において4～7のグリッドを掘る。縄土器片の出土が見られる。前の校舎建築における基礎コンクリートがかなり残っており、調査を進めるさまたげになっている。J-6、K-7グリッドに落込みが確認され、土竈になるものと推定される。

4月14日 (月)

グリッド調査を進めながら、土竈を半カットする作業を始める。J-5、K-4グリッド内にも土竈が確認される。2～3列の8グリッドを機械で表土を排土し、下層の調査を進める。この部分については遺構・遺物の確認はされなかった。

グリッド調査を南側にも進めていく。M-9、10グリッドを中心に土器片が集中して出土する部分が見られる。



4月15日（火）

朝から天候の状況が思わしくない。

昨日の作業において、土器が集中して出土する場所があったため、そこを中心に調査を始める。縄文中期初頭の土器を主体として多数検出されている。J-6グリッド中に検出された土竈内には一個体の浅鉢が発見された。文様からみて縄文中期初頭に位置される土器である。

午前10時まで作業を続けたが風雨が強くなり本日の作業はこれまでとする。



4月16日（水）

本日より南側へ拡張し水路脇までブルドーザーで排土を行う。土器集中範囲がほぼ確認され住居址であることが判明する。J-1号住居址とする。D-1を半カットし地層断面図を作製する。D-4～6を半カットする。



4月17日（木）

南側拡張部分のグリッド掘りを進める。

M-12、M-14、L-11、L-13、K-12、K-14のグリッド掘り、J-1号住居址のプラン確認のため土器集中出土範囲内を中心に手掘りを行う。縄文土器、石器出土、土竈の発見も続く。



4月18日（金）

M-9グリッドより注口出土、筒の部分だけであるが、長さ13cm余を有し、かなりの大きさである。D-6内の土器を清掃、写真撮影、半カット及び地層断面を調査した土竈から順次完坑を行う。J-1号住居址のプランが約半分程度検出された。



4月19日（土）

J-1号住居址の調査を中心に実施。

西壁及び北壁はほぼ確認できたが南壁が不明瞭でプラン全体の確認までには至らない。住居址の中央と推定される部分へ十文字にベルトを残し住居址内の排土に取りかかる。土器片は小さなものが多く、復元可能なような土器は見られない。水路脇のN-14グリッド周辺に落込状の土層が現れ、住居址の存在を推定したが、そのような遺構には至らなかった。



4月22日（火）

J-1号住居址のベルト断面精査、一部床面が検出されたので、引き続き、床面精査。

M-13グリッド内に土竈が検出され、半カットし、地層断面図作製、完掘をする。

他の土竈も完掘したものから順次、清掃、写真撮影を実施する。



4月23日（水）

J-1号住居址のベルトを取りはずし、柱穴、炉址の調査を行う。柱穴は5本（主柱穴）であり、炉址と思われる土竈が中央やや北寄りに検出された。炉址と思って調査を進めたが、焼土が全く検出されず、炉址として考えてよいか疑問が残った。



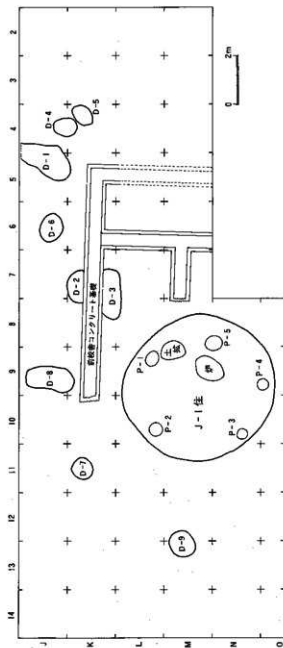
4月24日（木）

柱穴の掘り上げ作業、清掃、写真撮影を実施、全体測量、J-1号住の測量を行ってすべての作業を終了とした。

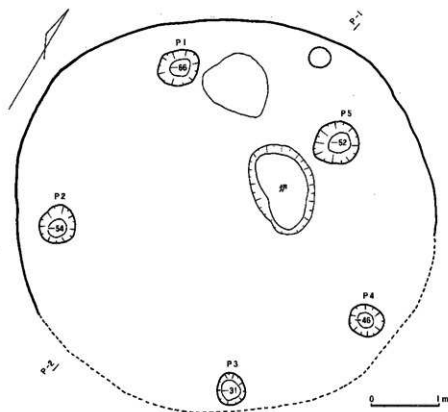


第三章 遺構と遺物

第1節 遺 構



第4図 遺構全測図

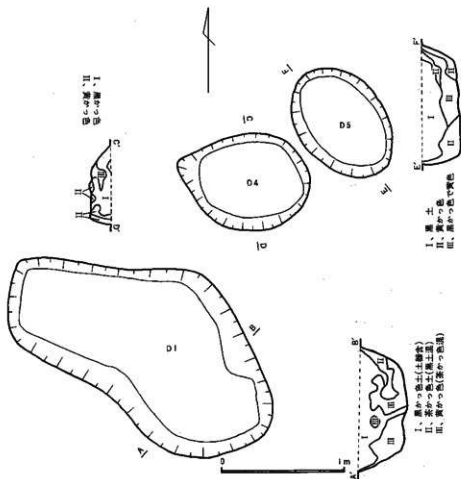


第5図 J-1号住居址実測図

1 住居址

1. J-1号住居址 (第5図)

M-9, 10グリッドを中心に第1号住居址が検出された。住居址の整穴部分は直径7.5mほどの円形であるが、南壁は掘り返されており推定である。落込み確認面からの壁高は15cm前後である。住居址内には、ほぼ等間隔に5つのピットが位置している。P₁は床面から66cmと最も深く、P₃が31cmと浅い。これ等の5ヶ所は主柱穴と考えられ、形、大きさなどは類似している。P₅の前の楕円の穴が炉址と考えられるが、焼土や、石組も検出されず、炉として使用したか不明である。位置的に考え炉址と推定される。床面は北側半分程は、かなりしっかりとした床面であるが、南側に寄るほど軟弱である。遺物は住居址の覆土を掘り下げる過程で多く出土しており、柱穴や炉址内からは遺物の検出は、ごく少なかった。出土した遺物は、ほとんどが縄文時代中期初頭の土器片であり、復元により、形が推定できるようなものは見られなかった。縄文時代中期初頭に位置付けられる住居址としては大型の部類に入る。



第6図 D-1、D-4、D-5号土坑実測図

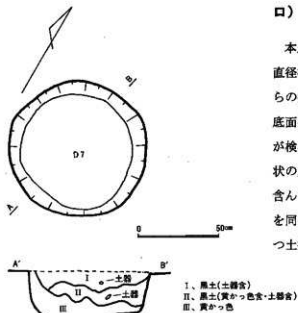
2 土 坑

イ) D-1、D-4、D-5号土坑 (第6図)

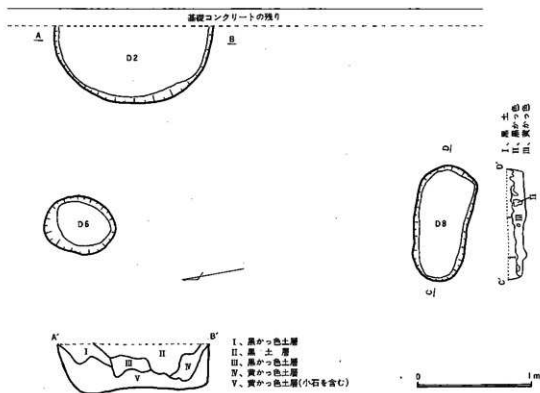
この3個の土坑はJ-5、K-4グリッド内に位置している。発掘調査におけるグリッド調査をこの部分から開始したので、最も早く発見された遺構である。D-1は長径 2.4m、短径 1.2mほどの不正楕円形を呈した土坑で、落込み確認面からの深さは40cmを計る。土坑の底や壁面はしっかりとした状況である。土坑内からの出土遺物は無い。D-4は長径約1m、短径80cmの楕円形を呈し、深さは20cmと浅い。土坑内からは縄文時代中期初頭の土器口縁部が出土している。やや薄手で焼成はあまり良好でない。D-5もD-4とほぼ同様な土坑である。縄文土器片が出土しているが、小片のため時代決定は困難であるが、D-4と同様で中期初頭と考えるのが妥当である。

口) D-7号土坑 (第7回)

本土坑はK-11グリッドの中に位置している。直径85cmほどの円形を呈し、落込み確認面からの壁高は40cmを計る。壁はやや急な斜壁で、底面共に調整されている。含土中より土器片が検出されている。半割竹管を多様した籠目状の文様が施され、胎土中には多量に雲母を含んでいる。この土坑もJ-1号住居址と時代を同じくすることから、同住居址と関係を持つ土坑であろう。



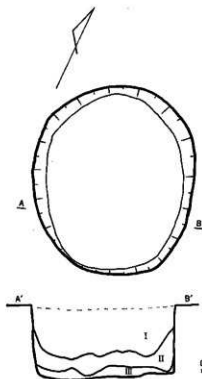
第7回 D-7号土坑実測図



第8回 D-2、D-6、D-8土坑実測図

ハ) D-2、D-6、D-8号土坑（第8図）

D-2号土坑はK-7グリッド、D-6号土坑はJ-6グリッド、D-8号土坑はJ-9グリッドにそれぞれ検出された。D-2号土坑は、ほぼ半分が旧校舎の基礎コンクリートの下に入っており、半分だけの発掘であった。径1 m 30cmの円形を呈するものと推測され、覆土は三層に分かれている。壁はやや急な斜面で、壁面はかなり整っている。D-6号土坑は直径50cm前後の小さなものであるが、土器が検出されている。他の土坑と同様に縄文時代中期初頭の特徴を示すものである。土坑もこの時期に使用されていたものと考えられる。D-8号土坑は長径1 m、短径55cmほどの小判形を呈しており、15cm前後と浅いものである。遺物の確認はされていない。



第9図 D-9号土坑実測図

ニ) D-9号土坑（第9図）

D-9号土坑はM-12,13グリッドに検出されたものであり、径1 m 10cm前後の円形プランを呈している。深さは45cmと深く、壁は直壁に近い状況である。覆土は三層に分かれている。J-1号住居址の周囲に点在するが土坑と同様なものと考えられる。

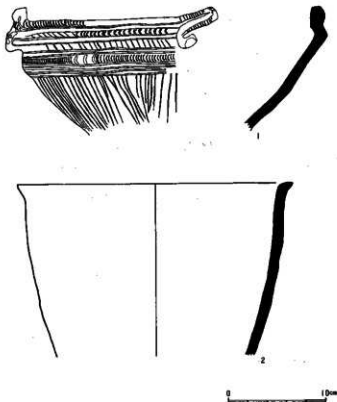
- I、黒土(茶かっ色遺)
- II、赤かっ色(茶かっ色遺)
- III、黄かっ色(ローム遺)

第2節 遺物

1. 土器 (第10圖)

1は本調査において出土した縄文土器で、ほぼ完形に復元できた数少ない土器である。D-6内から出土したが、土拭覆土のやや上部から出土しており、一個体とその場でこわれた状況であった。そのため土器片も散らばることなく、一ヶ所に留まっていたのである。

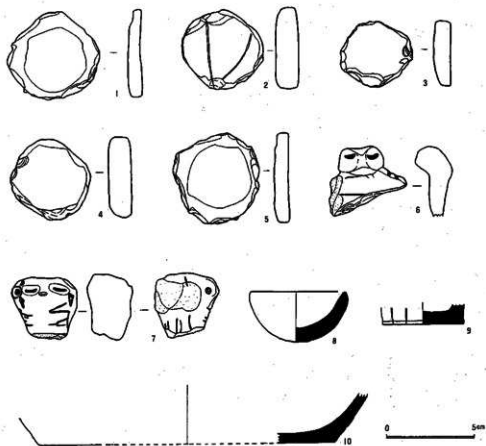
土器は口径32cm、器高14cmの浅鉢形を呈しており、焼成も比較的良く、安定感のある形のよい土器である。文様は上部口縁に集中し、施工工具はこの時期の特徴である、半割竹管を用いている。口縁部には全体を四等分して突起が付けられている。その突起及び口縁には連続爪形文が施され、それと平行して三本の隆帯が走っている。三本のうち真中の隆帯は竹管による連続爪形になっている。やや下がって太い隆帯が施され、これも竹管によって連続爪形が付けら



第10図 出土土器実測図

れている。これと平行して沈線が数本見られる。これも半割竹管による平行沈線が全面に施されている。全体的にやや黒味の強い土器で、胎土中には金雲母を多量に含み、内面は美しく仕上げられ、全体に均整のとれた形のよい土器である。縄文時代中期初頭梨久保式に比定される土器である。

2は土師器の長銅壺である。胴部から上のみであるが、器高は40cm前後と推定される。茶褐色の胎土中には石英粒を多量に含み、焼成はさほど良くない。胴部から口縁にかけ外反しながらほぼ直線的に立ち上がり、口縁部で強く外反している。8世紀ころの土師器と考えられるが、本遺跡からの出土遺物としては独立して単独の出土である。



第11図 土製品及び土器実測図

2. 土製品 (第11図)

本遺跡からは過去においていくつかの土製品が出土しているが、それは主として土偶である。これについては昭和60年における発掘調査報告書において既出遺物として記したのでここでは重複をさけたい。その中で特に珍しいものとして、土偶型土鈴の出土があり、これは県内においても極めて数少ないものとして注目されている。さて本発掘における出土土製品の数は少ない。1～5は土製土板である。土器の底部や胴部を利用して製作している。大きさは直径4～6cmの範囲で、周囲を調整してほぼ円形に仕上げている。「メンコ」と呼ばれている土製品であるが、使用目的は不明である。6は土器口縁部に付けられている動物状の突起である。J-1号住居址の覆土中から検出されたものであるが、本遺物は縄文時代後期の加曾利B式の時期と考えられるので、第1号住居址に相当する遺物ではない。7は土偶頭部である。頭部の平らな土偶で、両目と口とを沈線で表し、両耳の位置に横に貫通する小さな穴が見られる。後期の土偶と考えられる。8は環状のミニチュア土器である。



第12图 J-1号住居址出土土器拓影

J-1号住居址出土土器（第12図）

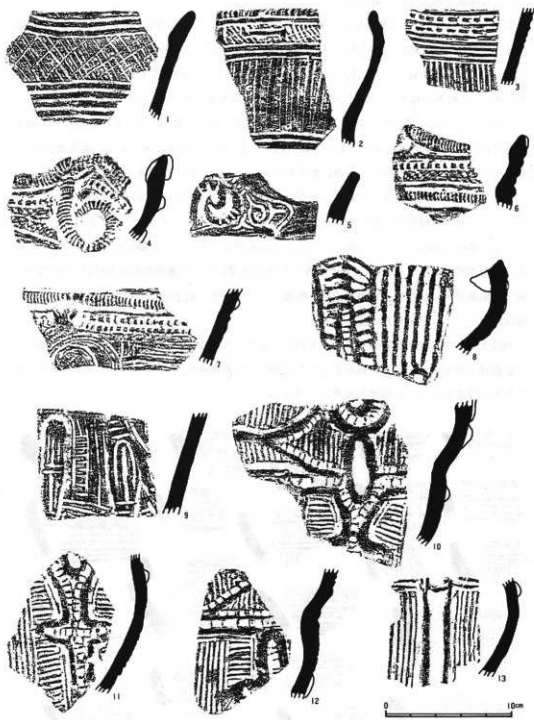
J-1号住居址の覆土中及び床面上から検出された土器片の拓影を第12図に示した。一部を除いて、いずれも縄文時代前期末から中期初頭に位置付けられる。多くは深鉢形の器形を呈し、文様も胴上部から口縁にかけて集中している。施文工具はこの時期の大きな特徴である半割竹管を用い、これを多種類に使い分けて、いくつもの文様を施している。拓影土器のいくつかについて気付いたことをまとめてみた。図の1は他の土器片より時期的にやや先行しており、関西系の北白川系土器の特徴を示している。赤褐色を呈し、胎土は極めて密であり、焼成は良好で、堅い感じの土器であり、内面も丁寧に磨かれており、他の土器とやや異なった感じである。

5は波状を呈した口縁部片である。竹管で沈線を施し、口唇部にはほぼ等間隔にキザミを入れている。9も口縁部の一部である。地文に縄文を施し、その上に半割竹管によって施文されている。直径3mmほどの竹管を用いて二本の文様を押し引きによって描かれている。その下を太い隆帯が蛇行しながら横走り、その上を太い半割竹管によって連続爪形文が付けられている。縄文前期最終末に位置する踊場式土器の特徴を示している。胎土中には金雲母を多量に含み、焼成良好でしっかりとした土器である。

36は大形の深鉢形土器胴部である。半割竹管を用いる施文方法は同様であるが、縄文地の中に結節縄文を加えている。黒褐色を呈した器面は石英が顔を出しゴツゴツした感じである。中期初頭の梨久保式土器の特徴を見ることができる。



第13図 グリッド出土土器拓影

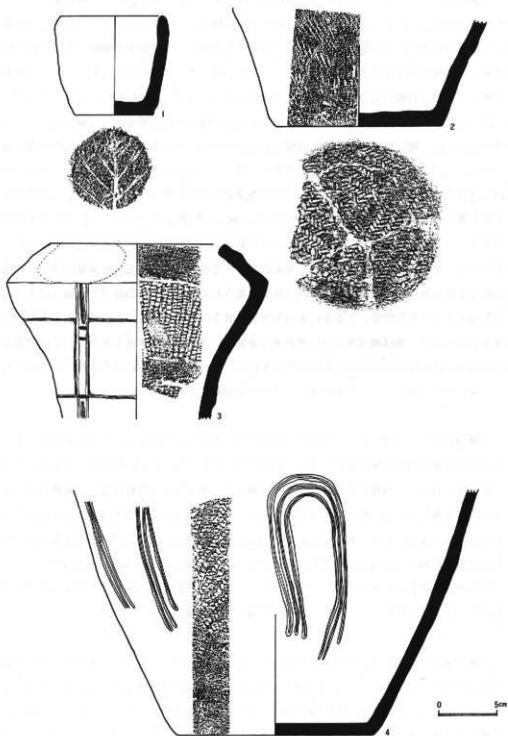


第14图 既出土器拓影

(第13図) — ここに示した拓影も第12図同様に縄文時代前期末から、中期初頭にかけてのものがほとんどである。時期的に細分することが困難なものもあるが、その中において特徴的な土器について少し説明を加えてみる。1は施文工具としてこの時期の特徴である半割竹管を多様して連続爪形文を施している。しかし、爪形の施し方、また胎土などもどことなく関西系の感じがする。前期末北白川下層3cに位置付けられる。白色に近い胎土で、焼成良好で、堅い感じのする土器である。2は土器口縁部であり、口縁は外側に折り返し口縁になっている。縄文地の上に、細い粘土紐を二本、口縁と平行に張り付けている。前期末畿山式の特徴を示している。3, 6, 7はいずれも半割竹管を施文工具とし、押し引きの爪形文を施している。3は細い竹管を使用して平行沈線を施し、その上を沈線と直行するように引いている。胎土が他の土器と異なり、極めて密である。前期末葉の蜻ヶ峰式の特徴を示している。4, 5も土器口縁部である。小さな波状を呈し、その口縁部には半割竹管の爪形押し引きを細かに施している。竹管による二条の平行状線も見られる。赤褐色を呈する胎土中には全雲母を多量に含み、焼成の良好な土器である。前期終末期踊場式の特徴が見られる。次に17～23に示す土器片は字文に縄文を施すもの、また竹管による平行条線がカゴメ状をなすもの、縦の平行沈線が密集するものなどが見られる。20は縄文地の中に結節縄文を施し、多様な文様構成を見せている。土器は暗褐色を呈し、胎土中にかなり大き目な石英粒を含み、中には土器表面に顔を出しているものもある。縄文時代前期末から、中期初頭にかけての好資料である。

(第14図) — 第14図に示した拓影は既出土器の中から二時期を選んでみたものだ。1～7の土器片は縄文時代中期初頭のもので、13図において記したものと同様のものである。半割竹管を施文工具とし、連続爪形文様や、平行条線及び、カゴメ状の文様あるいは縦線の平行連続沈線などを施している。胎土も同様な特徴を示し、多量の雲母とやや大き目な石英粒を含み、焼成は良好である。大型の深鉢の胴部及び口縁部である。次に8～13は縄文中期中葉の井戸尻期から曾利期に移行する時期の特徴を示している。大きな隆帯と平行沈線など、文様もダイナミックになり、いずれも大型の深鉢型土器であり、口縁部から器形がキャリパー状を呈すると思われるものもある。既出土器においてはこの時期のものが最も多い。

(第15図) — 既出土器で実測可能な四点を取り上げてみた。この他にも多数、実測可能な土器が出土しているが、そのうちのいくつかは昭和60年時の調査報告書に示してあるので、それ以外のものとした。1は小型の鉢である。無文で、底は木葉底になっている。形の割り合いに厚手の土器である。2は土器底部で、縄文地の上に曲線の隆帯が3本ずつ付けられている。いずれも縄文中期中葉の土器である。今後の発掘調査において、この時期の大型土器が多量に検出されることが推測される。

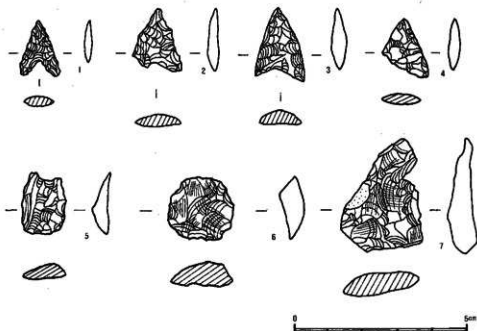


第15图 既出土器实测图

石 器 (第16図)

出土した石器のうち黒曜石を原石とするものをまとめてみた。

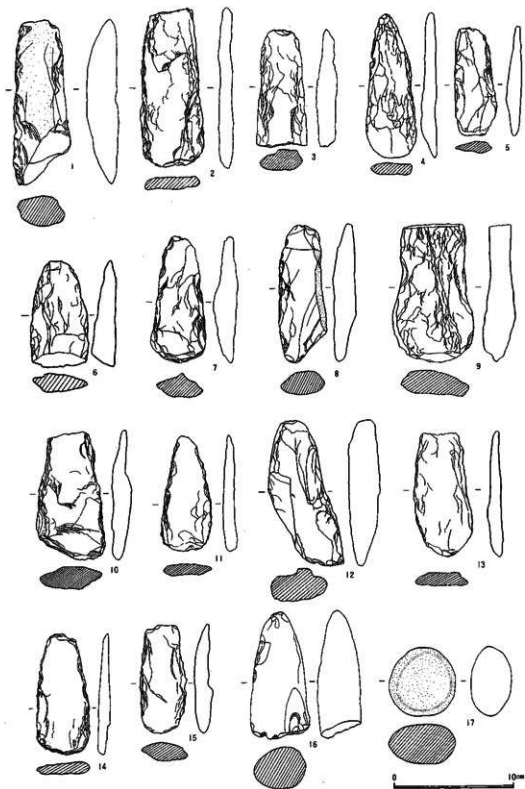
石鏃やスクレイパーなど7点と少ない。石鏃は1～4の4点であり、1はほぼ完形のやや小さ目の石鏃である。両刃縁は直線に近い、挟りは深い。全体に細かな調整により均整のとれた形になっている。2は五角形鏃に近い形を呈している。先端は細く剥離され、鋭利になっている。片脚を欠損しているが、挟りは浅めである。3はやや厚味を有する完形の石鏃である。両刃縁はゆるやかなカーブを描きながら鋭利に調整されている。4は胴下部が欠損した石鏃である。5は上部にノッチを付け、他は細かな剥離を加えたスクレイパーである。6はM-6グリッドから出土したものである。やや大き目の剥離を施しているが、表裏全面に及び、ラウンドスクレイパー的な感じがする。7は片側縁を調整した、サイドスクレイパーである。黒曜石製の石器としてスクレイパー類が多種類検出される場合が多くなっている。これについては現場の作業中に見落としの無いよう、注意しなければならない。



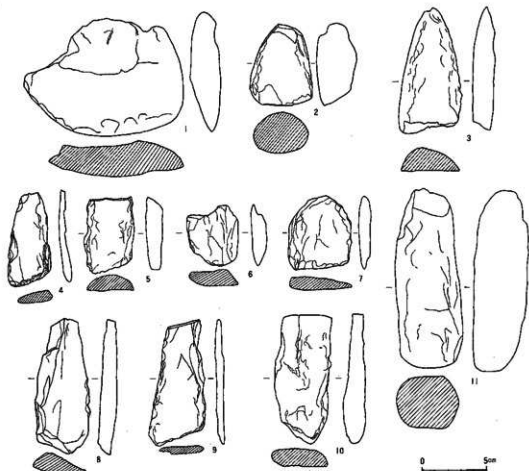
第16図 出土石器実測図

石 器 (第17図)

本調査における石器の出土総数は35点であった。そのうち黒曜石を材としたものが7点で、これについては第16図に示したので、ここでは17, 18図に示した石斧類を主として触れてみたい。第17図では、打製石斧15点、乳棒状石斧1点、磨石1点を示した。このうち打製石斧は、ほとんど短冊型を呈したものが多く裂型に分類されるものは3点ほどである。1は天竜川西側にお

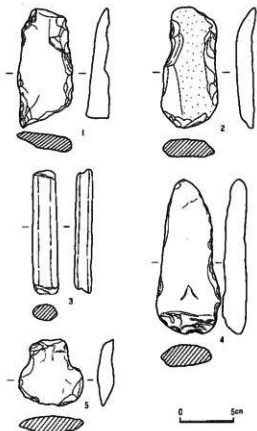


第17圖 出土石器実測圖



第18図 出土石器実測図

いて、最も多く使用される石質の砂岩質の石斧である。母石の割片を利用し、やや厚みを呈し、刃部は欠損しているが、上部側縁は磨耗し、着柄を物語っている。2は薄手の短冊型石斧であり、石質は角閃片岩である。刃部は使用による磨耗痕が見られる。3は短冊型の打製石斧である。胴下部で折れて欠損しているが、上部側縁は丸味が付く程に磨耗している。これは着柄時における磨耗と考えられるが、長期間の使用を物語るものと推測される。12は硬砂岩の打製石器である。片面に自然面を残し、やや厚みの石器で、調整も荒くなっており、刃部が欠損している。両側縁は打撃痕が著しく、石斧として使用できなくなった後はハンマーとして使用したものと考えられる。16の乳棒状石斧は、半ばで折れている。この種の石器は本例のように半ばで折れて発見される例が多いが、これは使用時においてこのように折れることが多かったのであろうか。このことについても一考を要する。石器は全面を打撃調整した後に研磨して、全体の形を整えている。17は安山岩製の磨石である。自然石を利用しており、一部分に磨いた痕が見られる。



第18図 出土石器実測図

(第18図) — 1はK-11グリッドから出土した横刃型石器である。母石の側縁を利用した石器である。大きく一撃して剥片を欠き取り、底部の薄くなった部分を刃部になっている。円弧状の刃部に細かな調整を加えている。上部も調整して全体の形を整えている。大型の横刃型石斧で、石質は砂岩である。2はJ-1号住居址内出土の石斧であるが、上部7cmのみで下部は欠損しているため、全体を推定することは困難であるが、乳棒状の石斧と考えられる。石質は硬砂岩である。3も乳棒状石斧の一部と考えられるが、半ばで折れ、その残りも縦に割れた状態である。石器全面を強い打撃で調整し、中央部のみを研磨している。石質は傾家変成岩である。4～7は小型の打製石斧であり、いずれも欠損品である。8～10は中型の打製石斧であり、いずれも欠損品である。調整が雑で刃部の使用痕はあまり見られない。石質は粘板岩、硬砂岩類である。11は太味の棒状石器で、使用目的が複

数である。上下の両端は打撃によって平らになるくらい変形し、また胴部には四ヶ所、なめらかに凹んだ所があり円柱状のものを磨いた痕跡が見られる。上下両面は、ほぼ平らに美しく磨かれ、砥石としても使われたと考えられる。主としては、重量を利用して、敲き石として使われた石器であろう。

(第19図) — 中山遺跡は過去における調査や、表面採集によって、多数の遺物が収集されている。それは昭和初年に、段丘上一帯に施された開田工事の時に最も顕著であり、良い資料が見られる。そのうちのごく一部であるが、既出の石器類を実測し図示した。1, 2, 4は今回の発掘調査時においても同様な形の石斧が出土しているが、前述した石斧類と同じものである。2は着柄のための袢りが顕著であり、刃部の使用痕も磨耗状況がよく観察できる。土堀り具として使用されたものと推測できる。3は石剣か石棒の一部と考えられる。断面形状は小判型を呈し、上下二面は平らに調整している。石器に昭和11年採集と記してあった。石質は傾家変成岩である。5は小型の石匙である。上部のつまみ部には両サイドから袢りを入れて紐がかりとしているが、やや浅い袢りである。底面の刃部は両側から調整して両刃型を呈する刃になっているが、あまり細かな調整はされていない。使用痕もはっきりしない。石質は砂岩である。

第IV章 まとめ

箕輪町の地形は、天竜川を中央にして東西に広がる河岸段丘と扇状地・台地地形、その背後に西の中央アルプス、東の南アルプスの連なる山地によって形造られている。先史・原史の人々はこちらの自然の中において、その時々々に匠みに生活している。

町内における遺跡の立地を分類すると次の四群に分けられる。

第一群 経ヶ岳山塊の山麓付近及び流下する河川の両側に立地する遺跡

第二群 天竜川西岸段丘上に並ぶ遺跡

第三群 天竜川東岸段丘上及び扇状地に立地する遺跡

第四群 低位段丘（沖積面）の遺跡

今回調査を実施した中山遺跡は、第二群に属する遺跡の中に位置している。この他にも独来・北城・南城・上の林などの遺跡が並び、やや北に寄ると上伊那地方で唯一の前方後円墳である松島王墓古墳も同じ段丘上に位置している。

中山遺跡は現在の中学校校庭を中心とした遺跡で、縄文時代前期・中期・後期・晩期・弥生時代中期・後期・平安時代と長い時期の遺構・遺物が検出されている。

また昭和60年度には旧校舎撤去により破壊される部分の発掘調査と、遺跡の保存状況を確認するための調査が実施されている。今回の調査は「調査の経過」の章にて解れたが、新プール建設に伴う工事によって調査が計画されたものである。プールの設置される位置は遺跡範囲内であるため、その保護処置につき、県文化課と現地協議を重ね、プール本体を地上式にし、グランド面に乗せるような設計とした。これにより工事は地下遺構に影響を及ぼすことなく進めることが可能となったのである。しかしながら、プール西寄りの機械室等の部分においては、工事の深さが遺構面に達するため、その範囲を調査することとなった。

調査を進める過程及び遺物整理作業中などに感じた事に触れ、まとめとしたい。

遺跡は昭和初期の西天竜の関連における開田工事、昭和30年の統合中学校建設において地形も大きく変化し、校舎の基礎工事によって遺跡に与えた影響も大きなものがあつた。それを裏付けるように今回の調査区内も旧校舎の基礎コンクリートがそのまま残っており、その部分においては調査不能であつた。

調査の結果における遺構・遺物の概要は次のようである。

- 縄文時代中期初頭住居址1ヶ所
- 同時代土埴9ヶ所
- 縄文時代中期初頭土器片多数、完形に復元1点、土偶1点
- 石器35点（黒曜石製7点）

などである。前述したように本遺跡を含む第二群は、町内においても最も遺跡密度の高い部分であり、数回の発掘調査を経過している。しかしながら縄文時代中期初頭に位置付けられる住居址の発見は今回が初めてである。このことは今回の調査における大きな収穫であり、笑輪町内における中期初頭の位置付けに良い資料となった。

今後予測される同遺跡の発掘調査において同様な時期の遺構・遺物が検出されることは十分考えられる。遺物においては、過去において収集された中に、貴重なものが多く認められている。今回の調査では、それに類するものは見られなかった。

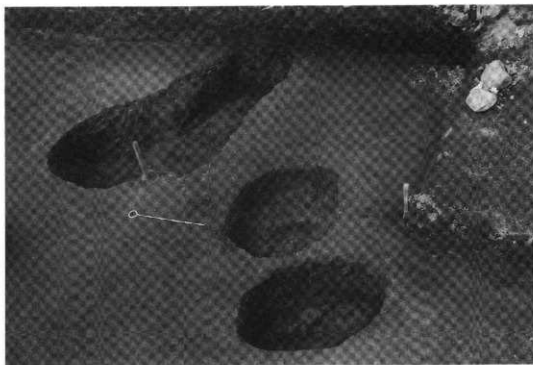
以上、調査の概要を記したが、調査着手前においてプール建設を設計する段階で、遺跡保護を十分配慮して地上式プールにすることができたことは、大変喜ばしいことであった。

最後に、発掘調査・遺物実測・整理作業などにご協力下さった方々に厚くお礼を申し上げます。

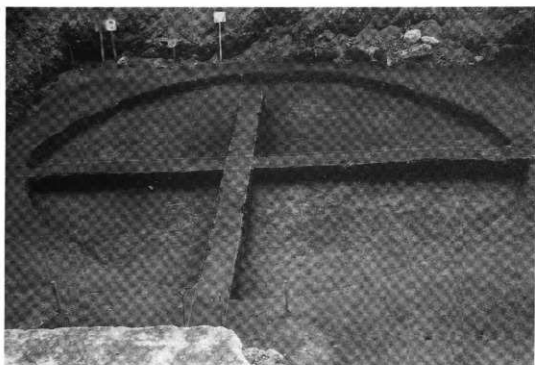
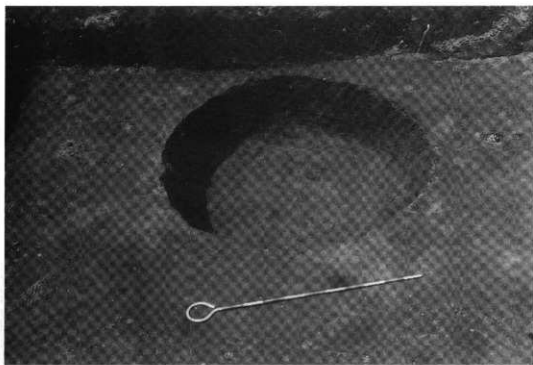
圖 版



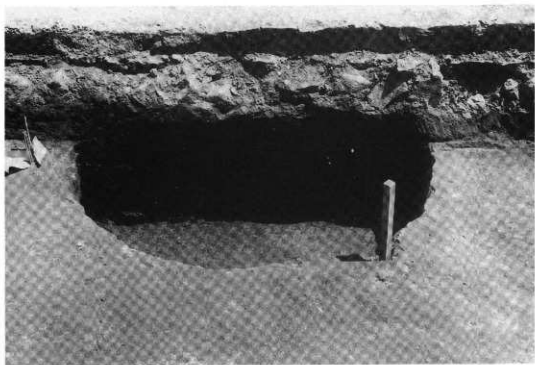
調査地近影 遺構全景



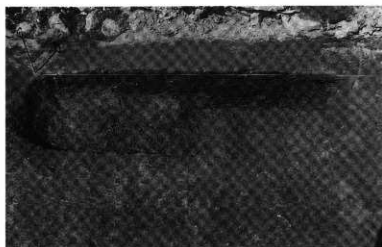
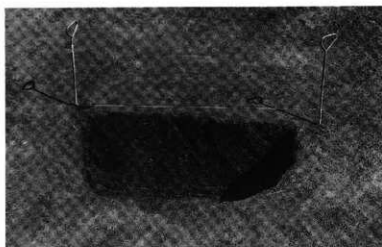
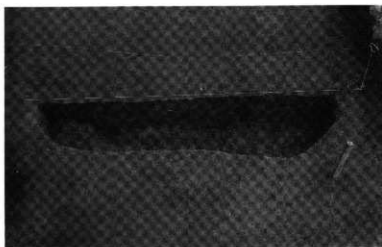
住居址 土坑 (1)



住居址 土坑 (2)



土坑 (1)



土 埴 (2)



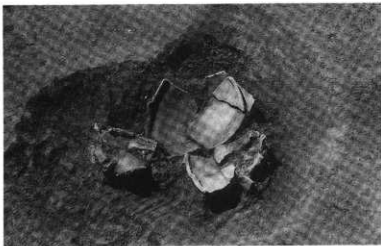
調査状況 (1)



調査状況(2)



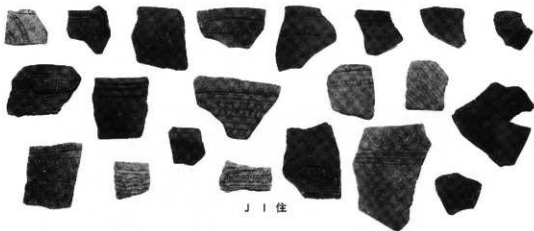
視察と学習



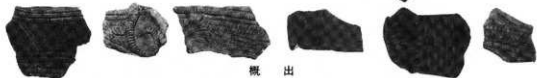
遺物出土状況



グリッド



J | 住



概 出



61年出土



出土遺物 (1)





瓶 出



調査参加者

中山遺跡
(第2次)

**長野県上伊那郡箕輪町
緊急発掘調査報告書**

昭和62年3月31日 印刷
昭和62年3月31日 発行

発行所 長野県箕輪町教育委員会

印刷所 伊那市 磯小松総合印刷所